

Tsuda Today



index

- P.1 2010年度卒業生へのメッセージ
- P.2 2010年度各賞受賞者報告／110周年記念事業
- P.3 学生報告
- P.4 Tsuda Umeko Memorial Garden 報告
- P.5 留学生報告
- P.6 活動報告、入試結果報告
退職者挨拶／クリスマス礼拝 他
- P.8 公開講座のお知らせ／2011年度オープンキャンパス

発行日 2011年3月30日
発行 津田塾大学
編集 企画広報課
〒187-8577
東京都小平市津田町2-1-1
Tel.042-342-5113
Fax042-342-5121
http://www.tsuda.ac.jp

2010年度 卒業生へのメッセージ 「導く光を見る目」に自信を

津田塾大学学長 飯野 正子

卒業生の皆さん、おめでとうございます。今年は巨大地震という緊急事態のため卒業式が中止され、残念ながら、皆さんに直接にはなく紙面での挨拶となりました。在学中の数々の思い出を胸に津田塾大学を巣立ち、新たな人生への第一歩を踏み出そうとしていらっしゃる皆さんを、心から祝福いたします。皆さんの前には、あらゆる可能性を秘めた道、いろいろな意味での成長と達成につながる道があります。どうぞ自信をもって、また津田塾大学の卒業生としての誇りを持って、その道を進んでください。

皆さんは、津田塾大学の前身である女子英学塾が創設されてからちょうど110年目の卒業生です。110年という長い歴史において、本学は、社会の変化を反映して改革や変革を重ねて成長してきました。そのような変化の歴史のなかで「変わらないもの」があります。「自立して社会に貢献する力をもったオールラウンドな女性を育む」という、創立者津田梅子先生の建学の理念です。この理念が時代を経ても輝き続けていることを示すのは、本学での学びを生かして広い世界で多様なかたちで社会に貢献している卒業生の姿です。その輝かしい卒業生の列に、皆さんは、今日、加わるのです。

ここで、1913年の卒業式の式辞に示された津田先生の教育理念を振り返り、皆さんへのメッセージといたします。1913年、津田先生は、18人の卒業生に向けた式辞のなかで、卒業を「風や波の試練に立ち向かう旅へ出発する船の進水」に喩えておられます。(原文は英語で、津田先生ご自身の声が録音されて残っています。古木宜志子本学名誉教授による日本語訳。)

「この学校に限らず、他のどの学校においても、学校だけで皆さんの行く手にあるものに対処できる力を完全につけてあげることはできません。一人一人の人生の航路には独りで立ち向かわなければならない、それぞれの困難と問題があります。私たちは、あらゆる面において、皆さんを助ける努力をして参りました。しかし将来は皆さんの手中にあり、皆さんは実際の体験における試練と教訓を待たなければなりません。」これは、ここにおられる皆さんへの言葉でもあります。つまり、皆さんは、これからの人生で問題や困難に直面したとき、それに主体的に取り組み、自分の力で解決の方法を探ることが求められるのです。ことに、現代のように情報量が多く、すべてがめまぐるしく変化する時代においては、自分を見失うことなく、また周りに振り回されずに、的確な判断を下すことが何より重要だと言えましょう。

このようなときに、何が皆さんを導いてくれるのでしょうか？ 津田先生は、こう述べておられます。「私たちが願う、皆さんの無事で幸せな航路には灯台の明かりと、危険を知らせる信号があり、それらは行く手に横たわる危険な珊瑚礁や狭い航路にあっても、きっと皆さんを安全に導くでしょう」と。この「灯台の明かりと危険を知らせる信号」を、津田先生は「導く光(guiding lights)」と呼び、具体的には、真理(truth)と、そして愛と献身(love and devotion)だと説明しておられます。

ただし、この「導く光」は、それを見る目がなければ、見えません。「皆さんのひとりひとりが『光を見る目、永遠の真理を知る洞察力、憐

れみももっとも優しい慈悲に満ちた心、闇を照らす信仰」をもちますように」と、津田先生は式辞を締めくくっておられます。本学で学び、いま社会に向けて羽ばたこうとしている皆さんは、ことに「光を見る目」と「真理を知る洞察力」をすでに身につけておられます。これこそ、まさに本学が皆さんに培っていただきたいと願って教育の基盤において、リベラルアーツ教育の成果なのです。

英文学科を卒業して芸術の分野で活躍中のある卒業生は、次のように述べておられます。「考えてみると私は、広く文化や歴史に対する相対的な視点、言葉というものの機能や魅力等とともに、体系的に思考し自分という一貫した精神の周りを日々確認していくための基本を津田塾大学の教育に負っているのではないかと思われる」。また、80歳を超えた今も現役の画家として活躍しておられる理科の卒業生は、作品に理科で学んだことが生きていと言われます。こうしたロールモデルは枚挙にいとまがありませんが、本学の卒業生が本学で「光を見る目」や「真理を知る洞察力」を身につけて、社会に貢献しておられることがよくわかります。

最近では厳しい「就職難」の時代といわれ、就職内定率の低さが報道されもしました。しかし、本学の「就職力」には安定した確かさがあります。就職内定率も昨年度と変わらない高さを保っています。これは、もちろん皆さんの努力による達成ですが、加えて、定評ある本学のきめ細かい就職指導の賜物でもあり、先輩方日々の研鑽と着実な実績のおかげでもあります。皆さんも輝かしい先輩に続いてください。そして皆さんにとって先輩がそうであったように、ご自身が後輩にとってのよきロールモデルとなってくださいよう願っております。

本学のスローガンである「21世紀の複雑で多様なニーズに対応すべく、グローバルに、そしてローカルに、勇気・情熱・志をもって世界を拓き、社会に貢献する女性」となって前進なさる頼もしい皆さんを、私もはいつも見守り、応援しております。「導く光」を見る目をもってに自信を持って、また津田塾大学の卒業生であることに誇りを持って、進んでください。皆さんの前途に幸多かれとお祈りいたします。



東北地方太平洋沖地震で被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。3月16日(水)に実施を予定しておりました「2010年度卒業式」は、地震による被害および余震発生の可能性を考慮し、学生の皆さまの安全を第一に優先し、中止といたしました。

■ 2010年度 卒業・修了(終了)者数 2011年3月16日現在

学部	人数	大学院	2011年3月16日現在		
			修士課程	後期博士課程	
英文学科	252人	大学院	文学研究科	11人	2人
国際関係学科	283人		国際関係学研究所	4人	0人
情報数理科学科	2人		理学研究科	6人	0人
数学科	54人				
情報科学科	49人				

2010年度 各賞受賞者報告

14名の学生に各賞が授与されました (敬称略)

De Ford (ド・フォード) 賞

フルブライト客員教授として本学で教鞭をとられた Sara de Ford 先生の寄付を基金として制定された賞。優秀な卒業論文を書いた英文学科 4 年生に授与。

■英文学科 4 年 山崎 千瑛

星野あい賞

第 2 代学長・星野あい先生の寄付を基金として制定された賞。成績優秀な数学科 4 年生に授与。

■数学科 4 年 坂本 志穂 / 執行 洋子

粕谷よし賞

第 3 代学長・粕谷よし先生の寄付を基金として制定された賞。優秀な修士論文を書いた文学研究科の学生に授与。

■該当者なし

藤田たき賞

第 4 代学長・藤田たき先生の寄付を基金として制定された賞。優秀な論文 (英文) を書いた国際関係学科 4 年生に授与。

■該当者なし

石坂泰三賞

元本学理事長・石坂泰三氏の寄付を基金として制定された賞。大学院に進学し、かつ成績優秀な英文学科 4 年生に授与。

■英文学科 4 年 木本 千世 / 古仲 彩 / 松本 茉莉恵

成績優秀で、よい論文を書いた国際関係学科 4 年生に授与。

■国際関係学科 4 年 檜木 美里 / 沼野 さおり / 渡邊 麻未

成績優秀な情報科学科 4 年生に授与。

■情報科学科 4 年 齊藤 聡美 / 柳武 真帆

多文化・国際協力コース賞

優秀なフィールドワーク報告の卒業論文を作成した多文化・国際協力コース 4 年生に授与。

■英文学科 4 年 大木 ゆりあ

■国際関係学科 4 年 森 恵

メディアスタディーズ・コース賞

優秀な卒業論文または卒業制作を作成したメディアスタディーズ・コース 4 年生に授与。

■情報科学科 4 年 高田 真理

情報科学科論文賞

優秀な卒業研究を行った情報科学科 4 年生に授与

■情報科学科 4 年 新谷 望 / 尾崎 麻子

「形状認識を使った拡張現実ゲーム」

■情報科学科 4 年 小野 彰子 / 柳武 真帆

「メロディ抽出による音ゲームの譜面自動作成」



創立 110 周年記念事業ニュース

2007 年 10 月から 3 年半にわたる募金活動もこの 3 月 31 日をもって終了となります。これまでのご支援を心より感謝申し上げます。

創立 110 周年記念事業は、これまでご報告しましたとおり、2010 年 5 月に津田梅子および津田塾大学の関係資料のデジタルアーカイブが公開となりました。続いて 7 月に 7 号館が完成し、9 月より授業で使用されています。現在は、2012 年 2 月完成を目指して新寮の建築計画が進んでいます。現在構内にある東寮、西寮、白梅寮の三つの学生寮では約 300 人の寮生が生活していますが、毎年入寮の希望者は多く、すべての入寮希望には応えられない状況が続いていますので完成が待たれます。この寮は、将来的には白梅寮の建替えの寮となります。建築予定地は北寮跡地、2 人部屋が 71 室で 142 人収容の 4 階建の予定です。

また、千駄ヶ谷キャンパスの整備計画も検討が続けられています。

募金状況 5,360 件 224,076,641 円 (2011 年 3 月 10 日現在)

皆さまのご厚意に感謝し、お名前を残させていただきます。

趣意書でご案内しましたとおり、寄付者ご芳名を銘板に残させていただきます。銘板は創立 110 周年記念事業で建設しました 7 号館 1 階の玄関ホールに設置する予定です。記載させていただくご芳名は、特にお申し出のない限り、卒業生はそのお名前を、在学生など卒業生以外の方はお申し込みされた方のお名前となります。

記載を希望されない方やお名前を変更される場合は、お手数ですが経理課までご連絡をお願いいたします。なお、すでにお申し出いただいている場合は、ご連絡は必要ございません。



▲創立 100 周年記念事業募金の寄付者銘板

お問合せ 経理課 Tel. 042-342-5125 E-mail keirika@tsuda.ac.jp

学生報告

「貪欲に学び、挑戦してきた4年間」

英文学科4年 加藤 彩

英文学科では、卒業式で謝辞を述べる総代を、その年度に卒業を迎える英文学科の学生による投票によって決定してきました。2010年度、その英文学科総代として選ばれたのが加藤彩さんです。残念ながら、今年度は卒業式が地震の影響で中止になり、謝辞を述べていただくことができませんでしたが、さまざまなことに取り組みられてきた加藤さんに津田塾大学での4年間を振り返っていただきました。

「前だけではなく、右も左も後ろも見られる人間になってね。そして、たくさんの挑戦をして世界を広げなさい。」これは、津田塾大学に入学する際、家族が贈ってくれた言葉です。私は、日本語教員養成課程、そして翻訳コースで学びたいという強い意志を持ち、この津田塾大学への入学を決意しました。周囲から猪突猛進型の性格と言われる私は、家族のこの言葉がなければ、他に目を向けることができずに、入学時の思いばかりに集中して大学生生活を終えたことでしょうか。しかし、この家族の言葉をきっかけに大学生活の目標を「視野を広げること」と掲げ、失敗を恐れず様々なことに挑戦してきました。

少数精鋭でしっかりと学ぶことのできる津田塾大学で、日本語教員養成課程、翻訳コースはもちろんのこと、入学前には興味を持っていなかった分野の授業も履修してみることで、新しい知識を学び、



▲カンボジアの小学校にて

吸収する面白さに気づくことができました。また、学業以外でもボランティア活動、留学生のサポート、外国人観光客対象のガイド活動、国際会議のスタッフ、一人旅等多くに挑戦することで、たくさんの人に会い、自分とは異なる世界の見方を学びました。

中でも、津田塾大学で100年を越える歴史を誇るサークルである津田塾大学英語会（TESS）のディスカッションセッションでは、その活動を通して数え切れないほどの仲間と出会い、様々な価値観に触れたことで、多種多様な側面から物事を捉え、考えられるようになりました。この経験は私を大きく成長させてくれたと感じています。

昨年12月、ディスカッションの中で「理想の大学生活は？」という質問を受け、胸を張って「自分の過ごしてきた4年間」と答えました。大学生活4年間を振り返り、私は後悔というもの一つも感じることはありません。もちろん、たくさんの失敗はしてきました。反省すべきことも少なくありません。しかし、そのすべてからあらゆる大切なものを学ぶことができました。私に学びを与えてくれたすべての出会いに感謝したいと思います。

来年度から、私は商社ウーマンとしてより広い世界に飛び出します。まだ見ぬ新たな世界でも、津田塾大学で築き上げた、常に学び、吸収する姿勢を失わず、新たな挑戦を続けていきたいです。



▲津田塾大学英語会の仲間と

学生報告

「現職教員として学ぶということ」

文学研究科修士課程英語教育研究コース1年 吉田 直子

津田塾大学では、あらゆる世代が高い学習意欲をもつ現代社会において、社会人の学びをさまざまな形でサポートしており、その一つに社会人入試の実施があります。大学院文学研究科では、2010年度より現職英語教員のための大学院修士課程「英語教育研究コース」が開設され、初年度は6名の新入生を迎えました。そこで、同コース第1期生の吉田直子さんに、仕事を継続しながら学ぶ日々の様子や思いを寄せていただきました。

私は他大学で教育学を専攻し、いくつかの職業を経たのち、英語教師としてのスタートを切って今年で14年になります。専門が英語教育ではなかったため教科教育についての学識が浅く、ただひたすらに生徒が好き、仕事が好き、という気持ちだけで走り続ける日々の中、「経験だけでは補えない専門分野の勉強をしたい」と機会を探っていました。そんな折、津田塾生の教育実習を担当した際、研究授業を見に来て下さった田近裕子先生から、千駄ヶ谷キャンパスの本コースをご紹介いただきました。勤務後に週3回通学することが果たして可能なか不安でしたが、「やってみましょうよ!」と田近先生に強く背中を押していただき、1期生として今日に至っています。

仕事との両立の中で、最大の課題は勉強時間の確保です。クラブの引率会場で試合と試合の合間にベンチで教科書を開いたり、冬休みは自分の受け持つ講習を行ってから今度は自分が講習を受けるために千駄ヶ谷へ駆けつけたり。読むべき論文がファイルに溜まり、プレゼンテーションの日が迫り、課題の提出期限が近づくと、あとは睡眠時間を削るしかありません。体力的にも精神的にも厳しい日々ですが、そんな状況を深く理解し配慮して下さる本コースの野田小枝子先生のあたたかいご指導のおかげで、なん

とか1年間続けることができました。教材分析・授業構成・効果的なタスク・評価法といった実践に即した内容から第二言語習得理論に至るまで、すべてが新鮮で、自分自身の日々の授業にも確実に変化が生じているのを感じます。また職員室をいち早く出る私を「いってらっしゃい。頑張って!」と送り出してくれる同僚たちにも感謝の気持ちでいっぱいです。

学んだことをすぐに教室で生かせる現職教員のメリットを存分に生かし、このコースで巡り会えた同じ志を持つ同期生たちと励まし合いながら、野田先生のご指導のもと「研究者としての視点を持つ教師」を目指して今後の研究を進めていきたいと、今、強く思っています。



▲英語教育研究コース1期生のみなさんと野田先生、山森先生（吉田さんは左から3人目）

英国Oxford大学St Hilda's Collegeに Tsuda Umeko Memorial Garden 誕生

初の女子留学生として津田梅子先生が滞在されたOxford大学St Hilda's College (当時はSt Hilda's Hall)。そのSt Hilda's Collegeが、先駆的な女子高等教育機関「女子英学塾」を創設した梅子先生を誇りに思い、梅子先生も目にされていたFellows' Gardenの一画に、このたびTsuda Umeko Memorial Gardenを創って梅の木を植えて下さることになりました。

梅の花に託す未来への夢

英文学科教授 早川 敦子

在外研究で春まだ浅いOxfordに到着した昨年の4月、最初の仕事は、アーカイヴスに籠って1世紀以上も前に日本に逗留した英国国教会の宣教師たちが書き送った手紙を読むことだった。津田梅子先生のOxfordでの講演(第11回高校生エッセー/翻訳コンテストのテーマにもなった)は、渡英のきっかけを作った英国人宣教師たちの存在なくしてはあり得なかったことだろう。津田梅子さんのことを女子高等教育の機運が高まる英国に伝える文面を探して、はらはらとこぼれていきそうな古い手紙の束を紐解き、時空を超えて語りかけてくる手書きの文字をたどった。優秀なアーカイヴィストらに助けられて手繰り寄せた歴史の糸のことは、何回かに分けてご報告した通りだが、このような縁に導かれて、Oxford大学St Hilda's Collegeから素晴らしいニュースを頂いた。

Oxfordの4つの女子大の一つだったSt Hilda's Collegeは、最初的女性飛行家をはじめ、法律家や作家、キュレーター、さらに理系文系様々の領域の研究者まで、パイオニア精神に溢れる女性たちを綺羅星のごとく世に送り出してきた。津田梅子が海外初の留学生としてここで学んだのはまさにその黎明期の1899年のことだったのだが、St Hilda's Collegeが「ここで学んだ一人の日本人女性が、帰国後日本で先駆的な女子高等教育機関を創設し、すばらしい人材を育ててきた」ことを記念して、Fellows' Gardenの一画にTsuda Umeko Memorial Gardenを造って梅

の木を植えて下さることが決まったのだ。「教師にも学生にも憩いの場であるgardenは、St Hilda'sのスピリットを思い起こし、育む場所でもあった」という。梅子先生も目にされたチャーウェル川に沿った美しい庭に咲く梅の花は、英国の地にあって二つの大学の交流を育てていってくれることだろう。

昨秋のFounder's Dayには、社会で活躍するSt Hilda'sの卒業生による講演が企画され、同時に1週間にわたって、著名な卒業生やここで学んだ女性たちの写真が展示された。パイロット姿も凛々しい飛行家Lettice Curtisの写真と、Bryn MawrにSt Hilda'sの同窓会を創設したジャーナリストJoanna Roseの素敵な肖像画にはさまれて、本学から寄贈された津田梅子さんの写真が壁を飾っていた。



garden planを見る発案者の一人、
Bronwyn Traversさん



Founder's Day
催しでの展示の様子

St Hilda's 訪問記

ケンブリッジ大学チャーチルカレッジ客員教授 山中 燦子 (英大17回)

昨年の12月5日、ロンドンで、津田塾大学同窓会ロンドン支部の方々と数年ぶりにお会いした。今回は「東アジアにおける日本の地政学的位置づけ」と言うテーマで、尖閣列島事件や北朝鮮の韓国攻撃など、日本を取り巻く国際情勢に関してお話しする機会を頂いた。意見交換も非常に深い内容で、女性の登用など日本の総理に聞いて頂きたい程。いつも感心するのは、同窓会ロンドン支部長Thurley房枝氏を始め、先輩が築いてこられた信頼と様々な分野での後輩の頑張りであり、改めて「大和撫子ここにある」と感じ入った次第である。

丁度、Oxford大学での講演の予定もあり、またとないチャンスと考え、その足で、早川敦子教授にお連れ頂き、St Hilda's Collegeへ赴いた。木々に凍り付いた雪が、街灯にキラキラと輝いて、幻想的な情景を醸し出すような夜だった。St Hilda'sでは、津田梅子先生が滞在された建物に宿泊させて頂く光栄に浴した。不思議な事に、初めて訪れたはずなのに、何となく見覚えのある懐かしさを感じた。翌朝、キャンパスを歩いてみると、玉川上水より少し幅広い川が流れ、大きなもみの木が何本も茂り、濃い黄土色のタイル貼りの、カチッとした建物が目に入る。「あ、津田のキャンパスと似ている!」

図書館のarchive centreで津田梅子先生への招聘状、津田先生の日記や礼状などを拝見し、まさに梅子先生がここで新たな女子教育の在り方を開眼なさったに相違ないと確信した。すなわち、米国Bryn Mawrで教育を受け、英国Oxfordで更に女子教育の在り方に強い影響を受けられて1899年に帰国され、翌年津田英学塾の創設に踏み切られたことになる。私自身、2004年から1年間、OxfordのSt Antony's Collegeに滞在したが、その時は津田梅子先生のごことはOxfordでは殆ど知られていなかった。し

かし、今はOxford大学でスピーチをした最初の日本人としても話題になり始めている。

St Hilda'sのSheila Forbes学長は、物静かだが芯の強い元外交官である。3年前に共学化に踏み切るなどリーダーシップを発揮しておられる。創設以来初の外国人留学生である津田梅子先生を大変高く評価しておられ、「日本庭園」を造られることを正式に決めて下さった。川に面した英国的なお庭の一画に紅梅・白梅を中心にした、言わば「梅子メモリアルガーデン」だ。

St Hilda'sは今後一層国際化を推進する方針と伺った。是非、津田塾大学との連携を深め、毎年留学生が来て、津田梅子先生が100年以上も前に学ばれたこの学舎で心豊かに学べる事を、卒業生の一人として心から願っている。

母校とは本当に有難く、そして嬉しいものである。津田梅子先生と英国とのご縁に接し、誇りに思い、そして微力ではあっても、これからも日本の平和と国際社会の安定の為にチャレンジし続けて行こう、とあらためて誓った1日であった。



▲ St Hilda's College を訪問
(左から山中先生、Sheila Forbes学長、早川先生)



▲ 当時のSt Hilda's College
学長に宛てた
津田梅子先生直筆の礼状

国際交流 協定校留学を経験して

本学創始者・津田梅子が日本初の女子留学生であったことは言うまでもなく、津田塾大学には学びや活動の機会を海外へ求める学生が多い校風があります。現在、世界の10か国・地域の22大学と協定を結び、学内選抜を経て毎年約30名の学生を派遣しています。また、本学からの派遣だけでなく、協定校からも長期・短期の留学生を受け入れ、相互に活発な交流を図っています。今回は、1年間の協定校留学をこの春に終える目黒沙也香さんと、津田塾大学での留学生生活を今年の1月に終えた淡江大学からの留学生、陳徳涵さんのお二人に報告を寄せていただきました。

夢の留学を通して気づいたこと

英文学科4年 目黒 沙也香

「英語」とは皆さんにとってどのような存在でしょうか。中学校へ入学して英語と出会った私は、習いたての英語で外国人の先生に話しかけ、心通じた時のうれしさに大きな感動を受けました。以来、私は英語に心を寄せ、留学を夢みてきました。英語が大好きで仕方なかった私は、津田塾大学に入学し、4年次での留学を決意しました。志望校はアメリカ国内でも高い教育水準を保ち、学生生活も健康で快適に過ごせることで定評のある、カリフォルニア大学デービス校(University of California, Davis; 以下UCD)を選択しました。その後、多くの方々のご支援により無事派遣留学生として選ばれ、留学を決めることができました。

2010年3月末、夢の留学生活がスタートしました。デービスは北カリフォルニアに位置し、生徒や教職員などの大学関係者が人口の90%を占めるとも治安のよい街です。初めの1ヶ月はすべてが新鮮で、例えばカードでの買い物当たり前である事、パケツサイズの大きなアイスクリームが売っている事、移民の歴史的背景から2ヶ国語以上話せる人が多い事、通りすがりの人とも気さくに始まる会話など、日本とは異なる点に出会うたびに感動していました。

UCDのキャンパスはとても広く、構内を自転車やスケートボードで移動している人がたくさんいました。授業では、生徒の発言が先生と会話をするように行われることが多く、成績も「先生に与えられる」というよりは、他の学生や先生と協力して「自分で獲得する」という印象を受けました(ちなみに、授業中の飲食が当たり前という点からもアメリカのカジュアルさを感じます)。授業自体の時間は少ないのですが、リーディングやレポートといった授業外の課題が多いため、ただ授業に出席し、テスト直前に対策してどうにかするというスタイルは通用しません。幸い、英語での授業は津田塾大学で馴染みがあり、語学面では抵抗なく授業をスタートすることが出来たものの、大学のカフェや図書館、24時間学習ルームではいつも熱心に勉強しているといったモチベーションがとても高いUCDの学生の中、置いて行かれないように、というプレッシャーを感じていました。

日常生活では、ドレスを着てクラブに行くというアメリカの学生らしい週末を体験したり、アジア・ヨーロッパ・南アメリカ・中東など、さまざまな国の文化背景を持った友人と知り合ったことをきっかけに、お互いの文化について語ったり、料理を作りあったりして楽しみました。

英語の成長に関しては、出国するまで「海外で1年間生活すれば英語はマスターできる」と信じ込んでいましたが、現実はなかなか難しいものでした。最も辛かったのは、現地の学生同士の会話のスピードがとても早く、私の理解などお構い無しに、その場の雰囲気盛り上がりていくことでした。「分からなかったら質問する」がモットーの私ですが、留学当初はあまりに分からない会話が多く、取り残された気持ちになりました。質問するといっても切りがない状態になり、英語に対しての恐怖感を抱いた時期もありましたが、時間が経つにつれ現地の英語に慣れ、徐々に会話の一員になり心に余裕をもって会話が出来るようになりました。

英語が楽しくて仕方なかった私にとって、恐怖を抱きながらも英語に触れ続け、それを克服する、ということはこの留学がなければ得られなかった経験です。また、この留学は海外に対してばかり強い憧れを抱いてきた私に、21年間過ごしてきた日本の文化のすばらしさ、日本にいる家族や友人たちの支えの大きさにも気づかせてくれました。日本を離れ、異国の地アメリカ・カリフォルニア大学デービス校で学び、過ごした1年間は、まだ見知らぬ世界へ抱く憧れや希望の素晴らしさ、またそれと同時に、自分が育ち支えられてきた身近な存在への感謝の大切さを教えてくれた、私の人生のかけがえのない宝物です。



▲UCDの学生たちとのハロウィンパーティー



▲大学構内でのランチ

津田塾大学での1年間 淡江大学 陳徳涵

時間が経つのは早いものだと思う。初めて東京成田空港に着いた日がまだ昨日のようである。来日した日は、大きくて重いスーツケースとノートパソコンを抱えながら、電車を3回も乗り換えて3時間もかけて苦勞して大学へ到着したおかげで、とても思い出深い日となっている。到着した夜はとても疲れたが、ちょうど寮の新入生歓迎会が予定されていた日でもあり、私も参加して留学生活を楽しくスタートできた。

津田塾大学では、日本語の勉強だけではなく、国際関係学科が提供している授業にも興味があった。そのため、学校が始まった時に色々な授業に出席してみたら、先生と相談して受講する授業を決めた。前期に日本語以外で受けた授業は、国際関係学科1年生必修の地域研究序説、比較文化序説であった。地域研究序説の授業では、世界中の少数民族の習慣や伝統的な祭について勉強した。また、比較文化序説の授業では、国々の食文化、死刑問題や宗教における価値観を勉強した。さらに、就職活動について、学者による講演会が何回も行われており、日本で仕事を探すためには自分は何ができるかが絶対条件なのかといったことや、私たちが今後直面する問題などについて考えさせられ、大変良い勉強になった。

国際関係学科の科目以外でも、女性とメンタルヘルス、レク活動、英語で受講する日本研究も受講した。女性とメンタルヘルスの授業で勉強した「エリクソン発達階段」という理論は日本に来る前、台湾の淡江大学で心理学の授業でも勉強したことがあった。同じ理論を最初は中国語で勉強し、さらに日本語で勉強したので、とても印象に残った。レク活動で日本の体育時間を体験するのは楽しかった。

後期は卒業論文を書くことに集中するため、日本語の授業以外では中国

近代史という授業しか受けなかった。その授業では、日本の視点から研究した中国近代史を勉強することができるので、今まで勉強したことがない内容が多く、とても興味深かった。

日本語の授業では、他の留学生たちと一緒に勉強できることが良かったと思う。敬語をはじめ、毎週お互いが準備してきた漢字の発表を楽しんだ。この1年間に日本語の書物を何冊も読んだり、実写版の映画も見たりした。

授業以外に、日本の伝統的な芝居、狂言と歌舞伎を見た。様々な交流会へ参加して、色々体験できたのは本当によかった。中でも印象に残ったのは、中村元哉先生のゼミ交流会でみんなと一緒に名古屋の南山大学へ行ったことである。発表会が終わってから、みんなで南山大学の交流会館で合宿し、翌日に名古屋市内を見物した。

夏休みには久しぶりの家族旅行で北海道へ行った。初めての夜行バス、初めてのフェリー体験、初めて北海道への旅行は本当に素晴らしい旅だった。春には津田塾大学構内の満開の桜を見上げ、夏にはお祭りや花火大会へも行き、秋には歴史ある京都での紅葉狩りなど、とても充実した1年間だったと思う。

津田塾大学のみなさんの支えのお陰で、充実した学校生活を送らせていただき、大変感謝している。



▲狂言役者と共に(陳さんは後列左から5人目)



▲他の留学生たちとの漢字クラス(陳さんは後列左から3人目)

課外活動奨励金(特別賞)の受給決定 快拳! 少林寺拳法部 全国大会3位

第44回少林寺拳法全日本学生大会が、2010年11月7日(日)に日本武道館で開催され、一橋大学・津田塾大学少林寺拳法部が、女子団体演武の部で3位に輝きました。団体演武とは6名から12名の拳士が、突きや蹴り、技を組み合わせた演武を行う競技で、技の正確さや、気合いの程度、全員の動きが揃っているかなどが評価されます。

今回、女子団体演武の部には、全国より25大学が出場し、本学の3位入賞は、1位の日本体育大学、2位の日本女子体育大学に続く大変素晴らしい成績です。

この快拳に対して、少林寺拳法部の活動を奨励・支援すべく、大学より課外活動奨励金(特別賞)を交付することが決定しました。これからは勉学とスポーツに励み、研鑽を積んで、一層活躍されることが期待されます。

少林寺拳法部代表 日置 友理さんより

今まで私達は入賞を目指して練習を積み、何度も試合に挑んできましたが、思うような結果を出すことができず、悔しい思いを繰り返してきました。その度に何が足りないのかをメンバーで悩み、考えながら進んできました。

そうした試行錯誤を重ねる中で、今回の大会で一番苦労したのは迫力を出すことでした。私達は動きを揃えよう意識するあまり、動きが小さくなって迫力を失いがちでした。そこで、一人ひとりが最高の動きをすることに重点を置き、その上で動きを揃えることを目指しました。

今回このような結果が残せたのは、悔しい思いをしてきたこれまでの過程があったからだと思っています。また、苦しい時もありましたが、悩んだ時にアドバイスを下さった先輩方、一緒に頑張ってくれた団体演武のメンバー、応援してくれた部員、全員の支えがあったから頑張ることができたのだと思います。私達3年生は昨年の12月で部活を引退しましたが、後輩のみんなにはさらに活気のある、よりよい少林寺拳法部を作ってほしいと思います。

出場メンバー(順不同)

安部 和菜さん (英文学科3年)
福山 彩美さん (英文学科3年)
井坂 有香さん (国際関係学科3年)
安間わかかなさん (英文学科3年)
藤田ひとみさん (英文学科3年)
日置 友理さん (英文学科3年)
中澤 薫子さん (国際関係学科2年)
森山 望さん (一橋大学3年)



▲3位入賞!

2011年度 入試結果報告 (2011年3月8日現在)

学部(学芸学部)	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
英文学科	245	2,379	2,112	949
国際関係学科	245	2,063	1,878	696
数学科	45	407	382	156
情報科学科	45	474	452	177
合計	580	5,323	4,824	1,978
大学院(修士課程)	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
文学研究科	15	29	20	14
国際関係学研究科	10	12	11	7
理学研究科	10	15	15	15
合計	35	56	46	36
大学院(後期博士課程)	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
文学研究科	5	3	3	2
国際関係学研究科	3	1	1	1
理学研究科	3	0	0	0
合計	11	4	4	3

※単位は人数。いずれも全入試方式合計数(学部編入学試験を除く)。

寄付者ご芳名 ご支援・ご協力に感謝いたします。

■一般寄付ご芳名

奨学金として	津田塾大学同窓会様	324,000円
学生用電子レンジ増設のため	匿名	100,000円
英語教育のため	田村 智子様	100,000円

一橋大学、慶應義塾大学、津田塾大学の
三大学コンソーシアム「EUSI」主催による

第2回 Euro-Asia Summer School 開催報告

EUSIが主催する第2回Euro-Asia Summer Schoolが、2010年8月23日から29日まで一橋大学において、8月30日から9月3日までルーヴァン大学(ベルギー)において実施されました。参加者は、韓国から10名、欧州から4名、日本から11名の合計25名で、本学からは、6名の大学院生・学部生が参加しました。日本からの参加者は、渡航前に6回のオリエンテーションを受け、サマー・スクールに臨みました。参加者たちは、このサマー・スクールでのEUに関する専門分野の講義やワークショップにおける活発な討論を通じて、勉学・研究への意欲が高まったようです。日本では、工場見学や、国会議事堂、外務省を訪問し、ベルギーでは、欧州議会、欧州委員会を訪問し、お互いの国の文化に触れ、国際交流を通じて貴重な体験をしました。

2011年度夏の第3回Euro-Asia Summer Schoolは、韓国とパリでの実施予定です。4月6日昼休みにEUコース・オリエンテーションを実施予定ですので、関心のある大学院生・学部生はぜひ参加してください。このプログラムの参加者はEUコース「EU地域統合論」の単位を取得することができます。なお、第1回(2009年度)、第2回(2010年度) Summer Schoolの詳細報告は、EUSI Website (<http://eusi.jp/>) Reportに掲載されています。



▲2010年サマー・スクールの様子

理事会開催報告

理事会が開催されましたのでご報告いたします。

第201回理事会 2011年3月9日

【報告事項】

- 2011年度入試志願者状況について
- 千駄ヶ谷キャンパスについて

【審議事項】

- 3月22日開催の評議員会に諮問することを審議する事項
 - 2011(平成23)年度事業計画(案)に関する件
 - 2011(平成23)年度予算(案)に関する件
- 本理事会での審議事項
 - 人事院勧告に伴う本学教職員給与の改定案に関する件
 - 2011(平成23)年度学費改正(案)に関する件

JAUW 国内奨学生に小島さん

第39回社会福祉奨学生

英文学科3年 小島 江利子 さん

社団法人大学女性協会(J.A.U.W.)による2010年度JAUW国内奨学生選考の結果、社会福祉奨学生に小島江利子さんが選ばれました。今年度の社会福祉奨学生応募者は7名。研究内容、学業成績、人物評価、将来への展望、障害の状況といった総合的な観点から、小島さんを含む3名の方が奨学生として選ばれました。

小島さんは先天的な身体障害を抱えながらも、それを乗り越えて、大学では言葉遊びの分析を積極的に研究しています。人の心に届く伝え方を考える現在の研究を活かして、将来は県や市の職員として、自分らしいサービスを提供することで、地域の基盤作りに関わりたいと希望しています。今回の奨学金を一助として、これからも勉強・研究に励み、社会に貢献する女性になられることを期待しています。

—2010年度退職者からのメッセージ—

夢のような40年

これまで、40年近く津田で研究・教育に携わることができたのは、とても幸せなことでした。津田に赴任した時は、まだ駆け出し状態の30前の新米でしたので、最初のうちは、学生からも津田の教員として認知してもらえなかったらしく、正門に入って、正面玄関近くまで歩いて来ると、「男の方は困ります」と言って、学生に行く手を阻まれるようなことさえありました。先輩や同僚の先生方を見習って、精一杯、奮闘努力を重ねて行くうちに、少しずつ、津田の教師として自分なりのものを出来るようになって行ったようです。当時、まだ新しい学問だった「変形生成文法」をテーマとして取り上げると、目を輝かせて勉強に取り組む津田の学生から、読書会形式の授業を別にやってほしいとせがまれるくらいに、情熱に燃えた多くの学生達に囲まれ、私自身も、ずいぶんやりがいを感じたものでした。



英文学科
千葉修司 先生

活気あるキャンパスの創成を!

津田塾大学での28年を振り返ると、何よりも忘れられないのは様々な気性の学生たちとの出会いです。「厳しくて、学生を泣かせる」教員という噂が代々伝わっていたようですが、実際にセミナー生になると先輩たちからの「伝説」は必ずしも正しくなかったと告白する学生が少なくなく、ある時代には「普通のオバさん」と呼ばれて、やっと私の本性に気がついてくれたかと感激したものでした。近年、学生たちの活気のなさを少々憂っていました。まだまだ捨てたものではないことに気づかされています。フェア・トレードを実践しているチカス・ウニダスのメンバー、あるいは NGO、Table for Two の活動を津田のキャンパスにも普及しようとしている Kibo のメンバーたちの志は、ひとえに活気あるキャンパスを創り出そうとする学生自身の心意気であることを知り、津田の未来に希望を感じています。Viva Tsuda College!



国際関係学科
菊地京子 先生

津田を去るにあたって

私が津田に就職したのは1973年4月、丁度第一次オイルショックの頃でした。スパートニクショックの影響により、当時理系の学部、学科が増設されていましたが、既に大学の教員枠もそろそろ頭打ちになり、就職も厳しくなりそうな時代でした。そんな中、津田塾大学数学科の入学定員が40名から90名になり、お陰で幸運にも津田に就職できたのです。

津田での最初の担当科目は代数学・幾何学でした。懸命にそして学生の反応を気にしながら授業を行っているつもりでしたが、期末テストを採点して愕然としたのを覚えています。私自身講義が上手であるとは思っていませんでしたが、これ程までに伝えるべき内容が伝わっていないとは思いませんでした。基本的には張り切りすぎであったと思いますが、それ以来「数学の面白さをどうしたら伝えられるか」という点にとても悩みました。自分自身「まあまあ納得できる授業が出来る様になった」と思われたのは、10年経ってのことでしょうか。或る事がきっかけになって、自分が感じている数学の面白さを伝えるには、何よりも「気持ちが大切」であることに気づきました。

津田に勤めてから38年、いまだに教えることの難しさを感じておりますが「教師になって良かった」と思っています。今思えば、教師としての私を育てていただいたのは、ひとえに津田塾大学、とりわけ熱心に授業に参加して頂いた学生の皆さんのお陰であったと思っています。本当に長い間有難うございました。



数学科
三島川寿一 先生

自由な校風

1973年に津田塾大学に赴任してから、38年の月日が流れ、定年の時を迎えました。津田に来る前に勤めていた大阪大学・静岡大学と比べるとずっと小規模な大学で、自由な校風であるため、数学の授業以外でも、総合講座の立ち上げ、情報設備の刷新、情報科学科設置への参画などの様々な体験をすることが出来ました。また、李仁夏先生の企画された韓国研修旅行と、今泉裕美子先生の企画された沖縄研修旅行にも参加させていただき、ふつうのツアー旅行では体験できない素晴らしい見聞の数々をさせていただいたこともなつかしい思い出です。

情報科学科・数学科の学生さん達は、こういった情報・数学の勉強以外の企画には無関心である傾向があるようです。でも、せっかく様々な経験をする機会があるので、もっと積極的に参加したら良いのではないかと、思います。緑の多い環境の中、すばらしい同僚・学生に囲まれた恵まれた38年だったと思います。皆さん、ありがとうございました。



情報科学科
田中茂 先生

退職にあたって

3月の定年退職の前に、時々キャンパス内を歩き、事務職員として津田塾にお世話になった30数年間を振り返る。東京都選定歴史的建造物に指定された本館（ハーツホン・ホール）は今でもその当時を偲ばせる風格で厳然と建っている。創立110周年を迎えた昨年、北校舎が壊され憩いのロードとなり、新たに7号館が建設され女子大っぽい(?) 趣になった。大学ホールの前に佇むと、そこに東屋が建っていた頃をなつかしく思い出す。30数年間の建造物の変化は著しいが、教職員の方々の津田塾を思う気持ちはどの時代も変わらず、津田梅子先生の思いが受け継がれていることを強く感じる。津田塾に入り総務課に配属された当時、「奉仕」という言葉が有形無形に私にも伝わり、OG職員ではなかったにも拘らず、ともに津田塾のために仕事をする喜びを感じた。30余年、四季折々の自然の美しさの中で働くことができたことに感謝しつつ、「人」と「人」が手を携え大きな力となり、津田塾大学がますます発展されることを祈念いたします。



企画広報課
本多多雅子 氏

東方で見た星 クリスマス礼拝 説教要約 (2010年12月8日岡島記念チャペルにて)

説教：関田 寛雄 牧師 (日本基督教団神奈川教区巡回牧師、青山学院大学名誉教授)

マタイによる福音書2章1～12節から三つのことを一緒に考えたいと思います。最初に、イエスの誕生を告げるクリスマスの星が東方で見いだされたということです。当時ユダヤでは、東の方角はよい意味を持ちませんでした。ところがクリスマスの星はこの東に住む異邦人たちによってまず認められました。このことから、民族の隔てなく万民が神の救いと祝福に招かれているというイエスの福音が示されました。第二に、クリスマスの星を発見した東の人々は当時最高の学問であった占星術の学者でしたが、彼らが星に導かれたところは貧しい馬屋の幼子イエスのもとであったということです。彼らはその小さないのちの前に宝物を捧げ、喜びにあふれました。本来知性、学問というものは、方向性、目的があります。小さく弱い者、痛みを覚え苦しんでいるいのちに仕えていくところこそ、学問の究極の目的なのです。第三に、学者たちは夢で告げられた通り、ヘロデの命令を拒み、別の道を通って帰りました。ここに学者たちの自立の知性があります。抑圧された弱いいのちに仕える知性は、同時に悪しき権力には抵抗する知性なのです。このクリスマスの星を発見した学者たちの歩みに参加すること、それこそが、津田塾大学の最も大切な伝統を継承する道です。



▲ 関田牧師による説教

クリスマス献金に心よりお礼申し上げます

総額18,173円のご寄付をいただきました。
この献金は社会福祉法人青丘社に寄付し、在日外国人の支援活動に捧げます。

IF YOU'RE INTERESTED...

公開講座

津田梅子記念 交流館プログラム

お申込み:津田梅子記念交流館事務室 TEL.042-342-5146まで
会場:小平キャンパス

ストレスマネジメント入門

- 講師:坂上 頼子氏(臨床心理士)
- 日 時:2011年5月16日、23日、30日、6月6日、13日
(月曜日 全5回 10:30~12:00)
- 参加費:10,000円

『翻訳に挑戦!』—英語の新しい楽しみ方 I

- 講師:柳田 利枝氏(翻訳家)
- 日 時:2011年5月14日、28日、6月11日、25日、7月9日
(土曜日 全5回 10:00~12:00)
- 参加費:10,000円

暮らしに役立つ法律講座

- 講師:板倉 由実氏(弁護士)
- 日 時:2011年5月14日、6月11日、7月2日
(土曜日 14:00~16:00)
- 参加費:各2,000円

スタンフォード大学聖歌隊コンサート

- 指揮:佐野 ステファン氏(スタンフォード大学教授)
- 日 時:2011年6月16日(木) 15:30~17:00
- 参加費:無料

夏休み子ども英語劇プログラム

- 監 修:吉田 真理子氏(本学准教授)
- 日 時:2011年7月25日(月)~30日(土) (予定) 6日間
- 参加費:12,000円

数学教員のためのワークショップ

- 講師:何森 仁氏(神奈川大学特任教授) 他2名
- 日 時:2011年8月1日(月)、2日(火) 2日間
- 参加費:12,000円

英語教員のためのワークショップ

- 講師:上田 明子氏(本学名誉教授) 他3名
- 日 時:2011年8月6日(土)、7日(日) 2日間
- 参加費:8,000円 ※受付は6月1日開始です。

総合2011

お問合せ:教務課 TEL.042-342-5130まで
会場:小平キャンパス

現代のさまざまな問題を取り上げ、「学生スタッフ」が主体となり、担当教員と協力して企画・運営にあたる「総合」。昨年度の「知の冒険～新たな可能性を求めて～」に続き、今年度は「現代の危機 ～みつめる、みなおす、みはらす～」をテーマに、各界でご活躍の方々にご講演いただきます。「現代の危機」を解決するために必要な〈総合力〉—自己と世界を「鋭く見つめ」、既成事実や既成概念を「根底から見直し」、危機的課題を「広い視野から見晴らす」ことのできる〈総合的な人間力(学問力)〉を涵養することが、今年度の副題が目指す目標です。

- 講師:講演予定者については、本学ウェブサイトをご参照ください。
- 日 時:授業期間中の毎週木曜日 13:00~14:30
- 聴講料:無料
- 聴講資格:どなたでも参加できます。
- 聴講手続:申込み不要。本学正門守衛所にて、住所・氏名等をご記入ください。

女性学

お問合せ:教務課 TEL.042-342-5130まで
会場:小平キャンパス

- 講師:【前期】清水 晶子氏(東京大学准教授)【後期】中村 美亜氏(東京藝術大学講師)
- 日 時:【前期】授業期間中の毎週水曜日 10:30~12:00【後期】授業期間中の毎週水曜日 14:40~16:10
- 聴講料:【年間】20,000円【半期のみ】10,000円 ※テキスト代等は含みません
- 聴講資格:18歳以上であれば、どなたでも参加できます。
- 聴講手続:詳細は本学ウェブサイトをご参照ください。

2011年度オープンキャンパス

お問合せ:企画広報課 TEL.042-342-5113まで

2011年度オープンキャンパスの開催日程が決定しました。

- 2011年6/11(土) 13:00~16:00
- 2011年7/30(土) 10:00~15:00
- 2011年8/13(土) 10:00~15:00
- 2011年8/14(日) 10:00~15:00
- 2012年3/30(金) 10:30~14:30

各回ともお申し込みは不要です。受付は開始30分前より行います。詳細は各開催日の1ヶ月前頃に大学ウェブサイトでご案内します。

オープンキャンパス、進学相談会についての詳細や最新の情報は、大学ウェブサイトをご覧ください。

【PC】<http://www.tsuda.ac.jp> 【携帯】<http://posh.jp/tsuda>

進学相談会実施予定地

今年度も全国各地の学外進学相談会に参加します。

- 札幌 ●仙台 ●郡山 ●福島 ●高崎 ●大宮 ●千葉 ●東京 ●横浜 ●新潟 ●松本
- 甲府 ●静岡 ●浜松 ●名古屋 ●大阪 ●岡山 ●広島 ●高松 ●松山 ●福岡

お知らせ